

北海道臨床教育学会 学校教育リフレクション部会

部会記録

2015. 10. 18

第6回（次回）

日 時 2015年11月8日（日）

14:00 -17:00

場 所 北海道大学 W 棟 508 教室 変更の場合はホームページでお知らせします。

指定テキスト 読まないで参加していただいてもまったく問題ありません。

次回テキスト D. ジーン・克蘭ディニン 他 『子どもと教師が紡ぐ多様なアイデンティティ～カナダの小学生が語るナラティブの世界～』（明石書店 2011）

- * 次回は少し趣向を変え、第7章に出てきた内容をふまえ、参加者が自分自身の個人的実践知を考える、ワークショップ型の部会を計画しています。

第5回

日 時 2015年10月18日（日）14:00 -17:00

場 所 未 定 決まり次第、北海道臨床教育学会ホームページにてお知らせします。

参加者 計8名

主な内容

前回同様、D. ジーン・克蘭ディニン他『子どもと教師が紡ぐ多様なアイデンティティ～カナダの小学生が語るナラティブの世界～』をテキストとして参加者と語り合いました。まずは参加者のお一人のわかりやすい解説によって、この本の読みどころ——「学校は変えられる」というメッセージが、縦軸（教師と子どもたちと学校のストーリーのぶつかり合いが新たなストーリーを紡ぎ出すことによって）と横軸（カリキュラムのとらえ直し）が織りなされ語られている——がわかりました。なるほど納得です。ナラティブで学校が変わる。夢のような実践例です。今わたしたちが少しでも学べる場所はどこにあるのでしょうか。ナラティブに関心を持ちご自分の研究フィールドで実践をされている参加者からの貴重なご意見を伺うことができました。また「ナラティブとは？」「エピソード記述」や「現象学的教育学のアプローチ」とどう違うのかということについても議論が交わされました。今回はミニカンファレンスは行わず、流れの中でそれぞれの参加者の経験が語られることになりましたが、その内容が不思議とつながっていたのは個人的におもしろいなと思ったところです。（荒木）

第4回

日 時 2015年8月9日(日)

場 所 北海道大学W棟508教室

参加者 計10名

主な内容

指定テキストは克蘭ディニン他 著『子どもと教師が紡ぐ多様なアイデンティティ～カナダの小学生が語るナラティブの世界～』(明石書店2011)でしたが、今回はミニカンファレンスで語っていただく方があらかじめ決まっていたので、こちらが中心となりました。ミニカンファレンスでは、小学校でのご自身の実践とそこで気づかれた子どもたちの今や学校の現実をじっくりと語っていただきました。先生はご自身の実践を臨床教育学的な観点から省察していくというところに課題を持たれていました。参加していて強く感じたのは、ご自分の実践を語るということの難しさと、そして可能性です。自分の実践を振り返るということは必然的に自分自身の評価に行き着きます。自分で自分を評価することの難しさ… それでも自分の生きた世界を語るということは、自分にしか見えないところに触れるということでもあり、そこを言語化したときに見えてくる自分自身と出会うチャンスでもあるということだと思います。ぜひ省察を続けて、よいご研究に発展してほしいと思いました。(荒木)

第3回

日 時 2015年7月12日(日)

場 所 北海道大学W棟508教室

参加者 計12名

主な内容

引き続き荒井浩道『ナラティブ・ソーシャルワーク』を読み、書かれた内容から派生する諸問題について、討論しました。教師も生徒も現場に支配的なドミナントストーリーの中で生きざるを得ない現実のなかで、学校教育でナラティブ的に子どもたちと関わるのがいかに困難であるかということをも改めて考えさせられました。課題図書の内容に関連して繰り返されたのは、教育現場において「支援しない支援」をすることなど果たしてできるのかという議論だったように思います。教育においてナラティブを語るためには、想像以上に、課題図書のフィールドとは異なる複雑な問題が絡み合っているのではないかと考えさせられました。そのことについて考えるためにも、次回は克蘭ディニンの教育現場におけるナラティブ実践に触れてみる必要があると思っています。(荒木)

第2回

日 時 2015年6月14日(日)

場 所 北海道大学W棟508教室

参加者 計11名

主な内容

荒井浩道『ナラティブ・ソーシャルワーク』読書会とミニ・カンファレンスを行いました。読書会では、それぞれの読んで感じたことを自由に語り、教育のなかにナラティブの方法を取り入れることの可能性と課題が少しずつ見えてきました。言うまでもなく学校という場はナラティブにみちあふれています。しかし気づけばこのナラティブがセオリーモードのさまざまなシステムに絡めとられ、極論を言えば一人ひとりの異なる訴えはノイズとしてそのほとんどは排除され、闇に葬られる運命にあります。ナラティブの何を、どんな聴き方で、どのように聴き取るかが課題ではないかと強く感じました。その上で、後半ははじめての試みとなりましたが、参加者から事例を提供していただき、ミニカンファレンスを行いました。

第3回では、さらに課題図書から、学校教育のリフレクションというテーマにおいてナラティブ・アプローチに学べることを具体化していければと思っています。(荒木)

第1回

日 時 2015年5月10日(日)

場 所 北海道大学W棟508教室

参加者 計15名

主な内容

今後の部会の進め方に関する話し合いが中心となりました。

論点

1. 学校教育にまつわる諸問題を臨床教育学的に読み解いていくとはどういうことか。

- ① 「臨床教育学」は「臨床」(ありのままを受け入れる)「教育」(子どもたちをあるべき姿に導いていく)という二つの異質なアプローチの組み合わせであることを常に念頭に置くべきであるということ。
- ② 一人ひとりのかけがえのないLifeを丁寧に聴き取る(I)、問題の背景にある社会的要因・時代的構造を探り当てていく(II)が、安易にIによってIIに気づいて終わり、ということだと、

それは安易な解決主義に終わってしまうかもしれない。ⅠによってⅡに気づいたその先には、Ⅱによる気づきをもとにⅠを書き直していく作業ではないか。

2. なぜナラティブ・アプローチなのか。

個人のLifeを語るとは現実の再構成である。それによってその人が現実をどのようにとらえているかが見えてくる。という社会構成主義的アプローチを前提としているという荒木の説明を前提として。

- ① ただ語るだけでは気づきは弱い。ナラティブ行為によってたとえその人にとっての意味が生成されたとしても、本人がその意味や重要性に気づけなければ結局ただのおしゃべりで終わってしまう。
- ② 語るよりもむしろ聴くことのほうが重要。誰が聴くか、どのように聴くかによって語り方も見えてくる問題も違って見えてくる。
- ③ ナラティブセラピーとナラティブアプローチが根本的に異なると思う点。ナラティブ・アプローチには、語られないところにこそその人が本当は語りた意味が含まれていると考える視点ではないか。ナラティブアプローチについて勉強していけば、おのずと、自分が本当に見出したいことを語ることはいかに困難であるか、鷲田が言うところの「噛み切れない論理のほうにこそその人の表現したい真実がある、という根本的な問題に行き着くのではないか。(荒木)

* * * * *



北海道臨床教育学会 学校教育リフレクション 部会について

さまざまな学校教育の現場で先生がたが日常的に直面する問題を、臨床教育学的視点から問い直すための時間を共有できればと願っています。ふるってご参加ください。

目 的

- 1 学校教育の現場で先生がたがふだん何気なく感じるような違和感やわだかまりを、少しでも現場から離れて臨床教育学的視点から問い直すための、静かな時間を共有する
- 2 学校教育が直面しているさまざまな問題を臨床教育学的視点から問おうとする学生や研究者が、現場の先生がたの声を直接聞くことで自らの知見を広げる機会を提供する

内 容

- 1 臨床教育学的視点から学校教育の諸問題を考えるための基本的文献の講読（読書会）
- 2 参加者が日常的に直面している諸問題を語りあい、実践感覚を共有する（ミニカンファレンス）

実施方法

実施日時 毎月第2日曜日 14:00 — 17:00

運営責任者・事務局

荒木 奈美(学会幹事・事務局) 問い合わせ先 araki-na@sapporo-u.ac.jp berdette73@gmail.com

小笠原 はるの(学会幹事)